あなたは、多くの知識を持ってはいるが、心は貧しい。
そして心が貧しいほど、知識への欲求は大きくなる。

『クリシュナムルティの日記』
J・クリシュナムルティ

詩的な言葉と、深遠な思想。
この書は、その二つが、本来、一つのものであることを、教えてくれる。
インドの思想家、クリシュナムルティの日記は、次のような描写から始まる。
「朝のその時間、小さな村の道には誰の姿もなく、遠くの田園は、樹々や草地や、囁くような微風に満たされていた。澄みきった星明かりの朝だ。雪の峰々や氷河は、まだ闇の中にあり、人々は眠っていた」

しかし、日常の情景を静かな一編の詩として語る文章の中に、突如、深い思索の言葉が語られ始める。冒頭に掲げたような、心に深く残る言葉である。
初めてこの文章に触れたとき、その形式の意味が分からなかったが、彼の著作を読むにつれ、その意味を解した。
彼が、その著作を通じて伝えようとしているのは、知識と論理では摑み得ないもの。体験と直覚によってしか摑み得ない「叡智」に他ならない。
そして、その叡智の言葉を理解するためには、まず、読者は、自らの感性の扉を開かなければならない。
クリシュナムルティが、美しく詩的な言葉と、深遠なる思想を連ねて語る理由は、そこにある。
「観察者と観察されるものは、一つである」
「全き静寂の中に、永遠の美が到来する」

こうした言葉は、知識と論理に囚われた思考では、決して理解することができない。

そして、クリシュナムルティは、こうした体験と直覚の大切さを語るとともに、いかなる権威にも依存しない心の在り方を語る。

「真理は、道なき大地である」

「あなたの他に、いかなる権威もない」

世界的な教団の指導者の地位にありながら、その教団を解散し、ただ一人の人間として生きたクリシュナムルティ。

その言葉は、深く心に響く。

たしかに、冒頭の言葉のごとく、我々は、空虚な心を満たすために、知識という権威を求める。そして、知識を身につけることで、心の空虚さを埋めることができるとの幻想に陥る。

しかし、実は、その空虚さと渇望感そのものが幻想であり、本来、我々は、それ自身で、すでに十全なる存在である。

その真実は、仏教思想が生まれた最初の瞬間に、釈尊(しゃくそん)によって語られている。

「天上天下(てんじょうてんげ)、唯我独尊(ゆいがどくそん)」

この言葉の真の意味は、そこにある。そして、この同じ意味を、クリシュナムルティは、静かなる永遠の言葉として残している。

あなたは世界であり、
世界はあなたである。

あなたが癒されるとき、
世界も癒される。